

アン・グラハム、ピーター・モレル=著 木谷直俊・塩見英治=監訳

グローバル経済における空港のファイナンスと投資

2018年7月発行
本体3,000円+税
創成社
ISBN 978-4-7944-3192-9



花岡伸也

HANAOKA, Shinya

東京工業大学環境・社会理工学院教授

本書の筆頭著者であるアン・グラハム教授は、空港運営分野において世界を代表する研究者である。彼女の代表的著作「Managing Airports: An International Perspective」は、2001年の初版以降、2018年に第5版まで出版されており、世界中で読まれている。こちらは空港運営にかかわる事項を幅広くまとめた教科書的な内容であるのに対し、本書はファイナンスと投資に焦点を当てており、インフラ・ファイナンスの空港版とも言える。なぜ、空港のファイナンスと投資に特化した書籍が、このタイミングで出版されたのだろうか。

いま、世界は新興国を中心に経済成長している。航空機メーカーや国際機関の航空需要予測では、アジアをはじめとした新興国の大増加が見込まれており、主に大都市における空港の容量不足が指摘されている。近年はパイロット不足が航空需要増加のボトルネックとして認識されているものの、それほど遠くない将来、世界のあちこちの大都市で、空港の容量不足が顕在化する可能性がある。空港のような大規模インフラは、すぐに建設・拡張・供用とはいきないからである。

経済的に豊かになれば、人は余暇に時間を割くようになる。仕事は他人や人工知能が代替できても、余暇はその人しか使えない。余暇時間の増加は観光需要に結びつき、航空需要を押し上げる。このように、世界の航空需要は経済成長以上に確実に伸びることは間違いない、それゆえ、大都市の空港や著名な観光地の最寄空港は、確実なリターンの見込める投資対象なのである。

全10章からなる本書は、実務的な内容と学術的な内容がバランスよく含まれている。2章「収入と費用」、3章「財務諸表」、4章「財務管理と財務規律」、6章「価値評価」は、豊かな実例に基づき丁寧に解説されており、空港での実務経験のない読者に大いに勉強になる。5章「ベンチマーク」と10章「経済的規制とスロット配分」は関連する多くの論文が引用された包

括的な内容であり、学術的に有益である。

日本の読者にとって、8章「民営化」が時宜を得た興味深い内容であろう。歴史的に見て、空港民営化は往々にして世の経済状況に大きな影響を受けている。7章「資金調達」を読めばわかるように、民営化において、資金調達手段は重要な役割を果たしているからである。関連して、1章「序論」と9章「空港間競争」には気になることが書いてある。空港はその財務特性として固定費用割合が高いことから、規模が財務上大きな要因となる。欧州委員会の見解では、年間旅客数100万人以下の空港では、資本費用だけでなく運営費用の回収も容易ではない一方で、500万人を超える規模になると全ての費用が回収可能で利潤が出るとのことである。空港運営において、民営化だけでなく、補助を考える上でも参考となる指標である。

本書をきっかけとして、原著にもぜひ触れてほしい。本訳書は専門家によって訳されており読みやすいものの、時折、英語表現に引っ張られた和訳も見られる。そんなときには原著を参照していただきたい。両書を同時に読み進めると、さらに理解が深まるだろう。本訳書については索引をつけていただきたいかった。索引があれば、気になるキーワードから読み始めることもできたであろう。

この書評の機会を得たことから、旧知のグラハム教授に、期待する読者像について電子メールで尋ねてみたところ、実務者と研究者の両方に読んで欲しいとの返答を得た。実務者については、航空政策・計画に携わる政府関係者、空港管理者、航空会社、旅行会社、ハンドリング会社、コンセッション会社などの業界関係者だけでなく、投資顧問会社や証券会社の関係者にも読んでいただきたいとのことである。充実した引用文献は、航空・空港を研究対象としている研究者や学生にとって有益とのことで、評者も同様の意見である。ぜひ手にとって読んでいただきたい。